

アラン-フルニエ作《肖像》

Alain-Fournier 《PORTRAIT》

関戸嘉光\*訳

SEKIDO, Yosimitu, tr.

何の罪もないのに、何の責め咎もないのに、身におぼえるこの後悔、この痛恨、それが如何なるものか、如何に傷深く癒しがたいものか、我々はそれを知っている。

シャルル・ベギー

ダヴィという名前だった。彼とはB高校で知りあった。15才のときである。その高校で10ヶ月ほど、私は海軍兵学校の受験準備をしていた。ダヴィは、たしか漁師か水夫かの息子だった。散歩に外出するときなど、彼も、私たちみんなと同じように、ごく短い海軍マントを羽織ったのだが、彼のは、かじかんでむくんだ特別大きな両の手がマントの裾から食みだしていた。

彼はごく目立たない生徒だった。いつもしょんぼりうなだれている、まだおとなになりきれないヒョロリとした体つき、そんな外見からは、彼が内に途方もない腕力をひそめていようなど、誰も想像もできなかつただろう。容貌の醜ささえ問題にされなかつた。寸づまりの顔、魚のように突き出た口、髪の毛は灰色、それを、当惑したときなど、手で撫でつけるのが癖だった…。

そばにいながら、永いこと私は、彼には目もくれなかつた。彼はその高校での落第生だった。彼が親しくつきあっていたのは、かくれてたばこを吸うことだけに熱中している、がさつでむつつりやのあの「ブルターニュ」の見習い水夫たち、その年かさ連中の十人ほど、であった。私が夢にもつきあいたいとは思わない連中だった。彼らは仲間同志のあいだでは、お互い仇名でしか呼びあわなかつた。「めすやぎ」「馱者」「ねこの皮」…な

ど。初めて彼に声をかけた或る日のこと、私が言葉丁寧に「あのオ、ダヴィ君、すみませんが…」といったら、彼はどろんとした目つきで私をみつめ、だいきらいな自分の顔を手でこすりながら、こう教えてくれた。

「ダヴィなんて、俺のこと誰もいわないよ。俺はな、ねこの皮ってんだ」。

それから、隣の生徒と顔を見あわせ、ぎこちなく笑いだした。

永いこと私は彼に話しかけるのを避けていた。仲間たちと集まって、みんなの笑いものになっているあのむくんだ大きな手で、力くらべをしたり、平手打ちの順おくりをしたりしている彼の姿を、ときたま見かけることがあった。彼は自分の惨めさをいとおしんでいるようだった。これ以上ふしあわせにならないようにと、私は願った。そうして私は、出来のいい通学生たちと休み時間を過ごした。この連中は私にバリのこと、芝居のこと等々を問いかけるのだった。

五月のころの或る日のこと、試験前に猛勉強したダヴィは、フランス語だったかラテン語だったか忘れたが、作文の試験で、私と並んで一番になった。これが機縁で、私はまた彼と親しくなった。教室でときどき、自分の訳文を私のと較べにやっていた。そのついでに、ちょっとばかり言葉をかかわした。思っていたほど彼は満足しているのではなかつた。みんなと同じように、彼も、いつの日か海軍士官になろうという大きな夢を抱いていた。しかし、それが実現するとは期待していなかつた。あれほどまで向上心というものを失った

\*名誉教授

若者を、私はこれまで見たことがない。彼は自分のことをきっぱりと、侮蔑をこめて語った。そして私が、何か彼をほめてもすると、彼は首を横にふり、鼻をならすのだった…。とはいえ、たまには、やさしさと不器用さにあふれた、彼本来の姿をみせる瞬間があることも私は知っている。愛嬌をふりまいたり、おどけてみせたりもした。ちょっとしたバカ話をして、自分自身がほんとうの笑いにされてしまうこともあった。

ダヴィの身に何が起こったか、それを知った今、彼と話しあったことを何か思い出そうとするのだが、何も思い出せない。試験のことと作文のことしか話しあわなかった。ほかのことを話そうという考えは、てんで思いうかばなかったようだ。とはいっても、1901年の夏のあの二、三の思い出は、私の心に焼きついている。それをここに書きとめておきたいと思う。私の悔恨と憂愁の思いから。

その朝は、ごく早くからみんな校庭に出ていた。舗装され、四方を壁で囲まれた小さな校庭だった。授業に入るまえの短い休み時間だった。陽はまだ射していなかった。私たちは冷い蔭の中に沈みこんでいた。しかし、上をむくと、隣の郵便局の屋根の上で電線が、昇る太陽にてらされて青、金、赤にかがやき、それがたくさんの小鳥の声でふるえているのが見えた。

誰ひとり叫ぶものも、遊ぶものもいなかった。あるものは、ポケットの奥からたばこを取りだし、手のひらのくぼみに隠して吸いながら、雨天体操場の屋根の下をあちこちぶらついていた。またあるものは、閉めきった大門のわきの、道路と同じ高さにストンと低くなっている穴のような所でひと塊りになっていた。手すりや鉄のかんぬぎに腰を掛けて脚をぶらぶらさせているのもいた。道路は見えなかったが、扉によりかかっていると、ときおり、すぐそばを、自分のすぐそばを誰かが通りすぎてゆく足音が聞こえた。

私たちみんな、頭が重く、胃の腑はからっぽで、軽い熱病にかかっているようだった。こんな麻痺状態が、突如として激しい平手打ちのような衝撃で、幾度か断ちきられた。「めすやぎ」が「ね

この皮」と呼びかける。笑声。誰かの本か帽子を遠くへ抛る。みんながそれを追いかける…。それから、三々五々ゆっくり戻ってきて、また腰をおろす。

そんなある朝のことだった。休み時間の終わりがちかくなると、私は、読んでいた詞華集のなかに《ドミニック》の一ページを見つけた。

卒業式は、ずっと以前から使われなくなっている礼拝堂で行われた。年に一回だけ、この日のために開けられ飾りつけされるこの礼拝堂は、広い校庭の奥まったところにあった。二列になった菩提樹並木の下を歩いて行くのだが、その豊かな緑で、殺風景なこの小路も少しばかり明かるい感じになっていた。マドレーヌが、明かるい夏の装いをして日傘をさした数人の若い女たちと一緒に、こちらへ来る、それが遠くから見えた。開かれた日傘は、太陽の光と影で虹のように彩られていた。裳のうごきにつれて軽く埃がまい、薄いけむりとなって纏いついていた。暑さのため小枝のさきの方は、かなり葉がもう黄ばんでいた。若い女たちの周りに、咲ききった花が散った。マドレーヌのまわっている長いモスリンの肩かけにも散った…云々。

次の節まで、今でもそらで誦える。

…叔母さんが私に挨拶の口づけをして、それから、私が獲った最優秀賞の冠を彼女に手わたしながら、お祝いをいってあげなさいと促すと、彼女はすっかり度を失ってしまった。自分の喜びを私に伝えようとして、また、世間のしきたりに従って讃辞を呈しようとして彼女が何といったか、私の記憶はさだかでない。彼女の手はかすかにふるえていた。たぶん、こういおうとしたのだろう。

「わたし、ずいぶん鼻が高いわ」、あるいは「すばらしいわ」。

どぎまぎした彼女の両の眼には、涙が宿っているようだった。感激の涙か、同情の涙か、それとも気の小さい乙女心の単なるたわいもない涙か。誰にわかるう！ 私も幾度も自分に問うてみた。しかし、ついにわからなかった。

少年だった当時の私の心を、長い尖った針のように貫いた一節だ…。自分一人の胸におさめておくことは、とてもできなかった。私はたちあがった。そのページを開いた本を手に、しばし歩いた、するとダヴィが、雨天体操場の壁に背をもたれて、じっとしているのが目にとまった。両手をポケットに入れ、だぶだぶの青外套にくるまって、涼しすぎる日蔭でふるえているようだった。私は彼にいった、「君、ちょっとこれを読めよ！」彼は立ったまま、ゆっくり読み、読みおわって顔をあげたが、その顔には、私の期待したような感動の表情はなかった。そこにあったのは、名状しがたい、こらえきれない苦痛の表情だった。彼は作り笑いをして、私の肩に手をかけ、静かにゆすりながら、こういった。

「このとおりさ、こうなるんだ！」

思いちがいだろうか、いま知った事実で過去の記憶をゆがめてしまったのだろうか、そのころダヴィは少しばかり生活を変えたように私には思えるのだが。もとの仲間から離れて「私たちが話していることを解ろうとして」通学生の仲間まぎれこんだり、試験に関係のない読書に打ちこんだり、そんな姿の彼がときどき見かけられるようになったのだ。フランス語の授業のあとで、一人ひとり順番に朗読をさせられることがあった。例の年かさの見習水夫の連中は、通学生たちとはちがって、そんなことには無関心で、朗読の勉強などバカにしていた。ところが、ある日のことダヴィがそれに挑戦したのだ。先生に励まされながらの努力だった。が完全な失敗だった。彼は普通の調子で読もうとして苦闘した、すなわち、コルネリュ劇の科白を、くだけた日常会話の調子で読んだのである。無音の「<sup>お</sup>e」はみんなすっとばしてしまい、大へんなせきこみよう、大へんなつかえようだった、だから文章の結びまで行きつかないうちに息がきれてしまった。…その日の夕方、彼は校庭で、いつもの連中のまんなかに立って、突然あの息ぎれした朗読の真似を始めた。それから、突いたり蹴ったり目茶苦茶にあべれながら、狂ったように笑いだした。

それから暫くして、七月の初め、バーナム・サ

ーカスがBにやって来た。休みの日のある朝、私が人けのない街はずれをぶらついていると、ダヴィに出会った。私同様、何もすることがなかった彼は、旧港広場の方へ降りて行ってみないか、と提案した。そこはアメリカのサーカスの興行準備が出来あがっていた場所である。

つい最近まで石ころやせとかけがやまと散らばっていた空地だった処に、これまで見たこともない奇異な世界が出現していたのである。遠い異国の人たちが、私たちの方へ横目をくれながら、四角な天幕の間を出たり入ったりしている。召使いたちは黙々として何かの仕事へ急いで行く。ずっと向うには、大きな食堂があって、そこから時々、食器のガチャガチャいう騒音がする。

こちらの木蔭では、ラクダが数頭うとうと睡っている。布きれをまとった大男が、それに何か英語で話しかけながら起こそうと苦勞している。その英語は、ダヴィも私もわかった。広場の高みでは、一頭の象が木の幹に軀を押しつけている。腰布をまいた異様な装いの男が二人、喉声で、訳のわからない同じことを繰り返しながら、象を動かそうとしている。そこは陽がさして光と影の斑模様をつくっている。

間もなく十一時になる時分だった。で、心残りではあったが、私たちは、白や灰色の大きな天幕に沿って街の方へ出ていった。長い壁のようになっている天幕に日光がさしていた。私はのどが渴いてたまらなくなった。葡萄酒ではおさまらない渴き、木蔭の青草に腰をおろして小川の流れを見ていたくなる、朝のあの渴きだった。ダヴィに、君ものどが渴くかときこうと思った。そのときだった、突然、夏の風が天幕の壁の裾を吹きあげた。幕営の一角がみえた。私たち二人は、好奇心いっぱい中を見まわした…。そこは、天幕と天幕とに挟まれた中庭のような所だった。ずいぶん広く感じられた。奥の日蔭に、こちらへ背をむけて一人の少女が本を読んでいた。たぶん曲馬の騎手だろう。華奢な顔すじに、結わえた髪がかかっていた。椅子に仰向けになっていたので、少女の方からは私たちは見えなかった。庭はあんまり爽かで静かで美しかったし、少女は遙か遠くにいるようにみえたので、私たちは望遠鏡でのぞいているかのような気がした。

私は伴れの方をふりむいて笑顔を見せた。彼は一瞬、私をじっとみつめ、手をあげて、音をたてるな、と合図した…。それから、そおっと布地をおろした。そして二人は、抜き足さし足でその場を離れた。

B高校を退学して間もない頃のことだった。革命記念日の祭の晩に私はダヴィに会った。記憶をたどってみると、それが私が彼に会った最後である。この日の祭りは、場末の民衆の行進を最後にして終わった。彼らは灯をともした提灯の下で、下品な文句の折返しを歌っていた。十一時にダヴィと私二人は帰ることにした。人っ子一人通らない途で提灯が燃えていた。高校への途だったか、いや、ずっと遠くだったかもしれぬ。ともかく不思議な夏の一夜だった。同じぐらいの年の娘に会った。どうして知りあいになったかわからない。その娘が得意そうにいった。

「ほんとよ、私、士官さん二人に誘われたのよ！」

ダヴィは怒って、ふるえる声で答えた。

「なんだと、おれは士官になったって、絶対お前のような奴を追っかけたりしないぞ」

そして彼は、私もきっと同じ思いと確信して、ふり返って私を見つめた。「おれたちが追いかけるのはどんな娘か、もうちゃんとわかってる、そうだよなあ…」とでもいおうとするかのよう。

それっきり、ダヴィとは会う機会もなく、10年の歳月が過ぎた。そして今、永遠に彼に会えなくなったことを知った。彼の思い出として残っているのは、古い葉書が2枚、返事を出そうなど夢にも思わなかった葉書である、それと、下のような新聞の切抜き、それだけである。

本日の朝、巡洋艦X乗組みの海軍中尉フランソワ・ダヴィ24才は、軍用ピストルの1発を自ら口中に撃ちこんだ。愛していた娘の父親に拒絶され、悲愁落胆、Bの自分のアパートに閉じこもって、父あてに絶望の手紙を書きおきして自ら命を断とうとしたのである。

たまは頭蓋を貫通していた。

こときれた状態で海軍病院へ移送された。

ダヴィがこんなことになろうとは、一体だれが予想しただろう！ 誰にもわからない。あんなに立派に成功したし、あんなに得意だったのに。「やったぞ、さあ、もう何でも思いのままだ」といっていたのに。彼の弟は兄貴のようになりたいと思っていたし、両親は何事につけ彼の意見をきいていたのに…。

ドアのむこうで、いま彼は苦しんでいる。医者は彼をひとりぼっちにしていってしまった。正午だ。誰もいない廊下を水兵がおが屑を撒きながら通りすぎる。

新聞はこの次第を報じている。ごくごく単純な正直一途の若者のことだ。結婚したいと思う若い娘がひとりあった。「休暇で両親の許に帰省中に、彼はその娘を見染めた」と新聞は書いている。私は、娘に出会ったその日の朝の散歩を念い描く。雨にけぶる夢のようなブルターニュの朝が果てるころ、少女がひとり、バルコニーの手すりにもたれている。あるいはそれとも、ちょっと笑顔を見せて庭の濡れた木立ちのかげに消える…。あゝ！ その笑顔の瞬間から、君の心臓は大きな絶望で一杯になってしまったのだ、友よ、わかるよ！

彼はステッキ片手に軽装で口笛を吹きながら歩いていった…。突然、自分がおそろしく不器用でのろまで醜いことに気づいた。彼は、《ドミニク》を思い出した、サーカスの中庭にアメリカの少女を私と二人で見つけたあの朝のことを思い出した。だが、こんどは、彼はまったくのひとりだった。むかし私が、そうとは知らず彼に道案内をしてやったことのあるあのロマンスの国、その国の難路で、いま彼は道に迷った。でもそこには私がいなくて、彼を励ましてやることもできない、険しい道で手をさしのべてやることもできない。自分の部屋へ戻って、彼は私に手紙を出そうと思った。しかしそれから、私から返事がないままになっている二枚の葉書のことを思い出した。そこで彼は、何もいうまい、誰にも話すまい、と決心した…。

## 解 説

翻訳に使用した原本は、《Alain-Fournier: MIRACLES, poèmes et proses; Fayard, oct.1987》に収められている短篇小説〈PORTRAIT〉である。《MIRACLES...》の初版は、作者アラン・フルニエの死後10年、1924年の刊である。妹のイザベルとその夫ジャック・リヴィエールの手によって編纂され、作者の戦死がもはや疑う余地のないものとなった時点での、追憶と愛惜の記念のための出版であった。

1987年の新版は、アラン・フルニエ生誕100年の記念出版で、内容は初版そのままである。詩8篇(1905~1906年作)と散文11篇(1907~1911年作)を収める。詩はすべて未発表原稿であるが、散文はその大部分が当時の雑誌に発表されたものである。ここに訳出した〈PORTRAIT〉も《Nouvelle Revue Française》誌の1911年9月号に掲載された。

作者と作品については、長編《ル・グラン・モーヌ》(1985年明治書院刊)の巻末に付けた拙稿〈解説〉を参照して戴きたいのであるが、これはすでに絶版になって久しいので、それをそっくりここに転載させて戴くことにする。そのなかで、この〈PORTRAIT〉について触れておいた。

### \*

作者アラン・フルニエ、本名はアンリ・アルバン・フルニエ。1886年10月3日生まれ。第一次世界大戦開始早々の1914年9月22日、ヴェルダン近傍サン・レミの森で作戦行動中行方不明になる。戦後、戦死が確認された。28歳の短い生涯であった。その短い生涯を一編の小説に結晶させた作品ただ一つを残して、彼は逝った。それが上記の《ル・グラン・モーヌ》である。

### \*

アンリ・フルニエが生まれたのは、フランスのほぼ中央、シェール県のラ・シャペル・ダンジロンという小さな田舎町である。5歳のとき、小学校の教員をしていた父の転勤で、一家は同県南部のエピヌイユ・ル・フルリエルに移った。これも小さな田舎町で、作品中のサント・アガトは、こ

の町をモデルにしたものである。ソーニュと呼ばれるこの地方一帯は、フランスでも最も開発のおくれた地域の一つで、道路、運河、さらに鉄道など、開発に着手されたのは、ようやく19世紀も半ば以降のことである。

作品のなかで、しばしば感動をこめて描かれているように、この地方は、<sup>もみ</sup>縦の森と雑木林、原野と牧場と耕地、それらが緩やかに起伏する丘陵のあいだに広がり、その間をシェール川その他のロワールの支流が、幾つもの沼沢や湿原をつくって流れ、遠くに近くに教会堂の尖塔や古い城館が望見される、そんな、フランスで最もフランス的な景観にめぐまれた地域である。この美しい自然が、そこで育った作者アンリの夢多い少年時代の追憶とともに、この作品の背景とも舞台ともなっているのである。

アンリは、進学のため単身パリに出るまで、すなわち初等教育を終える12の年まで、ここで両親と三つ年下の妹イザベルとともに暮らした。一家は、町役場と棟つぎになっている学校の校舎の一部を住居にあてていた。このあたりの事情はかなり忠実に、作品の最初の部分に描かれている。

パリに出たアンリは、有名校ヴォルテール高等中学校に進学する。しかしやがて、《宝島》や《ロビンソン・クルーソー》などを読みふけた幼いころからの海へのあこがれが抑えきれなくなって、ついに彼は志望を海軍兵学校に変えた。そしてその受験準備のため、プレストの中学校へ転校した。

プレストはフランス最大の海軍基地で、兵学校の所在地でもある。海軍志望の少年たちが集まるその中学校は、それにふさわしく、空気は粗野で殺伐だった。繊細なアンリの神経には到底たええないものであった。彼は一年で再びパリに戻った。しかし彼の海へのあこがれは、その後も消えることがなかったようである。作品のなかでしばしば、嵐にただよう船などの比喩が用いられていることや、主人公の一分身フランツ少年が失意落魄して放浪の旅をつづけながらも、錨の記事の帽子は離さずにいることなど、その心情の刻印とみてよいであろう。

パリに戻ったアンリは、ラカナル高等中学校に入り、エコール・ノルマル・ジュベリウール（高等師範大学）を目ざして勉学に励んだ。はじめは成績抜群の優等生であったが、上級に進むころから、文学の魅力にとりつかれるようになり、詩作などに没頭して学業に身が入らなくなっていった。同級に同好の友ジャック・リヴィエールがいた。後に妹イザベルと結婚して、アンリとは義理の兄弟となる、彼の終生の心の友である。（リヴィエールは1919年以降25年のその死まで、『N・R・F』（新フランス評論）誌の編集長として活躍し、20世紀のフランス文壇に新しい一時代を画した評論家である。文学的思想的信仰的にとくにカトリック詩人ポール・クローデルの強い影響を受けている。）この文学熱のため、アンリは学業のほうは成績が下がり、目ざすエコール・ノルマルの入試に二度まで失敗する結果になる。

そのころのことだった。正確には1905年6月1日、キリスト昇天祭（アサンション）の日である。一つの小さな事件が、いや、アンリの生涯にとっては極めて重大な、決定的な事件が起こった。

彼は偶然路上で、老婦人をいたわりつつその手をひいて行く一人の美しい乙女に出会ったのである。乙女のこの世のものならぬ聖なる美しさに、彼は魂を奪われてしまった。正にそれは、彼にとって天啓であった。それから10日ほど後、聖霊降臨祭（ペンテコステ）の日に、再び彼はその乙女に会った。今度は、遠くからよそ目に垣間見るだけではなく、わずかではあるが言葉をかわすことができた。

「僕はオーギュスタン・モーヌといます…、学生です。」「私の名前ですか？…マドモワゼル・イヴォンヌ・ド・ガレー…」。「僕があなたにつけた名は、もっと美しい名でした。」「まあ、どんな名でしょう？」。……「私たち二人ともまだ子供なんです。考えが足りませんでした。…さようなら、ついていらっしやらないでください」。こんな、作品のなか（第一部 XV）の会話は、このときの現実の会話の再現である。

本名イヴォンヌ・ド・キエヴルクールという実在のこの美少女は、作品のなかで女主人公イヴォンヌ・ド・ガレーとして造形されることになる

が、それは、単なるモデルの提供といった程度をはるかに超えて、作品そのものを成立させる根本モチーフ、さらに、作者アンリのその後の生活の意味そのものともいうべきものであった。

作中のイヴォンヌはモーヌと結婚するが、現実のイヴォンヌはアンリと結ばれるさだめにはなかった。彼女にはすでに婚約者があった。そうでなかったとしても、貴族の出であり貴族としての誇りを内に潜めていた彼女にとって、一介の田舎教師の息子との結婚など、考えられもしないことであった。このときの束の間の邂逅は、同時に訣別であった。しかしアンリにとっては、イヴォンヌは「永遠の女性」として魂の底に深く焼きつけられてしまっていた。彼女のけだかい清らかな姿を、心のなかで更に一層聖なるものに純化すること、これがその後のアンリの生活のすべてとなっていった。彼は作品のなかで（第三部Ⅳ）主人公モーヌの口を借りて次のように言っている。「ひとたび楽園に足を踏み入れたものが、どうして世間なみの生活に甘んじることができるだろう？世間の人たちの幸福は、僕にはみんなくだらないものにしか思えない」。

運命的な邂逅のこの日から2年たったある日、アンリはイヴォンヌが結婚したことを人伝てに聞く。ちょうど2度目の受験に失敗した翌日だっただけに、打撃は深刻だった。かすかな望みも断たれ、彼は翌1908年の秋、兵役をすますため入隊し、士官候補生を経て、南フランスのミランドで軍務についた。ミランドはピレネーに近い、したがって聖地ルルドにも近い。心の苦悩を語る友もなく孤独だった彼は、ここに滞在中、2度ほどルルド詣でをしている。

1年余の軍隊生活を終えたアンリは、再び学生生活に戻らず、社会人としての途を選び、『パリ・ジュルナル』の文芸欄担当記者になった。1910年5月のことである。この年の秋アンリは、ジャンヌ・Bという同郷出身の娘と知りあう。（手紙の中ではアネットと呼んでいる。）ジャンヌは、パリのノートル・ダムのおそばに姉と二人でお針子をして暮らしていた。同様の設定で作品の中に出てくるヴァランティーヌ・プロンドーは、この実在の娘の投影である。しかし、ヴァランティーヌが幼児の純真さを失わないでいる素朴な存在として哀

れにも美しく悲しく描かれているに反して、現実のジャンヌには、肝心の、純真というその一点が欠けていた。「決して愚かな女ではないのだが、純粹といったものが欠けている」とアンリはいつている。おそらく、彼の純粹性に対する要求が厳しすぎたのであろう。あるいは、理想化されたイヴォンヌ像が強すぎたのであろう。いさかいが絶えなかった。幾度もアンリは家出した。結局、2年あまり続いた二人のあいだは、不幸な結果に終わった。

シャルル・ペギーとの出会いもこの年のことである。アンリはこの預言者的詩人思想家から強烈な印象をうけ、急速に彼に傾倒していった。ペギーは初め、ジャン・ジョレスらの社会主義陣営に属し、ドレフュス事件ではドレフュス擁護の闘士として活躍したが、生来の宗教的性向から、ジョレスらの政治的実利主義にあきたらず、袂を別って、今やロマン・ロランらとともに、人類愛の理想をかかげて精神性の昂揚を呼びかける思想家として、当時のフランスの若い魂のまに立ち現れていたのである。ペギーの情熱的な訴えはアンリの心を強く引きつけた。ペギーの説く、現実に優位する夢の世界、超越の次元の神秘の世界は、アンリにとって最後の救いだった。こうしたペギーの精神的影響のもとに、初めて、アンリはこの作品の創作にとりかかることができたのである。翌11年中、執筆は進み、12年の末には、ほぼ完成にまで漕ぎつけている。

なお、ペギーの影響をいうなら、ポール・クロードルの影響も忘れてはならないであろう。心友のリヴィエール同様、アンリもこのカトリック詩人から多大の影響をうけている。アンリの人と作品のカトリックとしての正統性に関して、研究者評論家たちが持ち出す論拠の一つが、このクロードルへの彼の高い評価である。あれほどクロードルを敬愛した彼がカトリックの正統を逸脱するはずがない、というのである。アンドレ・ジードの影響は一時的なものにすぎなかった。

ついでに、先行の文学作品で彼に影響を与えた主なものについていえば、神秘主義的ロマン派の系統の諸作品があげられる。とくに第一に、ネルヴァール(1808~55)をあげなければならない。夢と現実の、幻想と追憶の交錯する世界のなかで

再び永遠の無垢な幼児性にめぐりあう《シルヴィー》などは、正にアンリの文学の世界そのものである。その他、フロマンタン(1830~76)の《ドミニック》や、敬虔で優しく素朴な詩《あしたの鐘から夕べの鐘まで》の詩人フランシス・ジャム(1868~1938)などがあげられる。

1913年5月、死の前年である。アンリは偶然の機会から、イヴォンヌに再会する。イヴォンヌは今や2児の母親になっていた。この再会が彼にもたらしたのも、それはある意味で致命的であった。真実の愛、純粹の愛、完全な幸福、それはこの世では決して実現されえないものであるということ、肉を離脱した彼岸の世界において始めて成就されるものであるということ、この真理を彼は、実感として確認したのであった。主人公モーヌは、さきに引用した個処につづけて、こう言っている。「あの神秘の館を発見したとき、僕は、完全と純粹の頂点に、二度とふたたび到達することのあり得ない頂点に立っていたのだ……僕はおそらく、死においてのみ、あのときの美に再びめぐりあうことができるのだ、とそう思う。」《ル・グラン・モーヌ》は、この年の夏から秋にかけて『N・R・F』誌に連載され、10月には1巻にまとめて出版された。献辞はただ「妹イザベルへ」となっているだけであるが、初版の、局紙に印刷された特製本第一号はイヴォンヌへ贈られた。その扉には「ヴォグリニエズ伯爵夫人イヴォンヌ・プロジェ・ド・キエヴルクール」と記されていた。

翌1914年8月1日、アンリは開戦と同時に召集され、ヴェルダン近傍の戦場で斥候に出たまま戻らなかった。ドイツ軍の捕虜になっているのではないかと、一縷の望みがもたれたが、大戦が終わっても帰還しなかった。彼は、自ら望んで死の世界へ旅立っていったようにさえみえる。作中でしばしば主人公の口を借りて言っているように、死後の世界こそ真実が実現する世界だとするアンリにとって、死は、肉からの霊の解放として、むしろ待ち望まれたとも考えられる。

\*

以上がアンリ・フルニエの短い生涯のあらましである。イヴォンヌ体験を中核にして、すべてを

それに収斂させた一生であった。その短い一生を一編のロマンに結晶させたのが、冒頭で一言したように、この作品《ル・グラン・モーヌ》である。他に、詩、散文、エッセーなどもあり、没後リヴィエールと妹イザベルの手によって編纂され、《奇蹟》(ミラクル)と題して出版されているが、それらすべて、《ル・グラン・モーヌ》のための習作といつてよい。

とはいえ、この作品は決して、作者の経歴を写實的にたどるいわゆる自伝小説ではない。そうしたたぐいのものとは全く質を異にする作品で、そこに繰りひろげられているのは、追憶や郷愁や、悔恨や憧憬や、さまざまな思いをこめた作者の内面の世界であり、夢と現実とが微妙に交錯する神秘的な超越的世界、いわばネルヴァールの世界である。

作中の人物について一瞥しておこう。主人公は表面的には前記のようにル・グラン・モーヌであるが、そのほかに、フランツ・ド・ガレーとフランソワ・スーレルという二人の少年がいる。この三人とも、作者自身の分身とみてよい。

豪気で誠実で冒険心に富むモーヌは、あのようになりたいという、作者の願望の形象化であり、いわば未来形の分身であろう。イヴォヌの弟フランツは、いつまでも無垢の幼児の魂を持ちつけ、気まま奔放な空想の世界に遊ぶ少年であり、そのため破滅の途をたどるのであるが、これは、作者の幼き日々への限りない郷愁の形象化であり、その意味で過去形としての分身といえるであろう。内気な心やさしいフランソワは、「すべてが終わり、もはや、ただ塵泥を残すのみとなった今」(第一部Ⅷ)の時点で、失われた冒険と期待の若き日々を物語る「私」であるから、当然、現在形における分身である。そして、聖なる愛を胸の奥深く秘めて孤独のなかを静かに生きるフランソワの姿は、作者自身の現在、作者が最終的に到達した信仰の境地でもあったのだろう。

主人公ではないが、いわばワキ役として重要な意味を持たされているのが旅芸人の道化役者ガナーシュである。主人公たちがそれぞれ、それぞれの時点で形而上の世界を描きだしているとすれば、このワキ役は、その背景としての現実の世界の表現である。ガナーシュは、自殺に失敗したフ

ランツを助けだし介抱する。一座に迎え入れ、生活の面倒一切をみる。そのためには盗みも働く。最後までフランツを見捨てず、フランツのためヴァランティエヌをさがして彼とともにフランス全土を駆けめぐる。ガナーシュがサーカスの舞台上で演じるピエロ役は、そのまま現実の世界の人間の悲しい運命の姿である。

物語のあらすじを述べることは、この作品にかぎって、ほとんど無意味であろう。ただひとこと、作者は何を訴えたかったのか、この作品の根本感情といったものについて、述べておきたい。

創作の執筆進行中の1911年に発表された作品が一つある。作者のprestige時代を舞台にした《肖像》(ポルトレー)と題する短編である。この小さな作品が、よく、長編《ル・グラン・モーヌ》を一貫する根本感情を伝えているので、これを簡単に紹介することにしよう。

——あだ名を「猫の皮」という武骨一点張りの生徒がいる。詩を朗読するにも、散文同様に棒読みにする。その生徒が凶らずも恋におち、ひとり悩むことになる。かつて同級生だった心やさしい一人の友(それが作中の「私」である)を思い出し、彼に悩みを打ち明けようと思う。しかし、その友には、以前に2度ほど手紙を出したことがあったが、返事は来なかった。それを思い出し、救いのない孤独感に陥る。そして自殺する。きつとそうだったに違いない、と、「猫の皮」が自殺したことを後になって風の便りに聞いた「私」は、癒しようのない悔恨にくれながら、そう思う。

そしてエピグラフとして、「過ちもなく咎もないのに覚える後悔の念、罪を犯したのでもないのに覚える罪の意識、それが如何なるものであるか、そして、それが如何に深刻な如何に癒しがたいものであるか、我々はそれをよく知っている」というペギーの詩が引用されている。

これは正に、《ル・グラン・モーヌ》の世界である。この作品は、こうした根本感情から突きあげてくる作者フラン-フルニエの全生命をかけての「祈り」であった、といえるであろう。

\*

《ル・グラン・モーヌ》は公刊の頭初から、お

おむね好評だった。一部には、ゴンクール賞候補として熱心に推すむきもあった。受賞は逸したが、新しい文学の開幕を告げる先駆的作品として、評価は年とともに高くなり、揺るぎないものになっていった。今日では、前世紀の平板な外面的な写実主義を超えて意識の内面あるいは深層の表現を試みる20世紀文学の最初の代表的作品の一つとして、ブルーストやジェームズ・ジョイスなどと並ぶ評価を受けている。

この作と作者について、研究書や評論・評伝のたぐいの文献も、おびただしい数にのぼっており、今日なお、その数を年々増しつつある状態である。それらの内容について詳しく論評する暇も力もないので割愛せざるをえないが、その盛況ぶりを紹介するためひとことだけ言えば、あるものは先行文学との類縁系譜、後続文学への影響をたどる文学史的研究であり、あるものは超現実主義<sup>シュールレアリスム</sup>の作品とする新解釈の評論であり、またあるものはフロイト＝ユング流の精神分析による新解釈、新研究であり、最近ではレヴィ＝ストロースの構造主義的方法論による分析研究も発表されている、といった状態である。

この作品のカトリック的正統性についても、熱っぽい論議がかわされている。大著《フランス宗教文学史》の著者アンリ・プレモン師は、この作について「神のささやきを聞く思いがする」といったが、たしかに、この作品の宗教的性格は誰も否定しない。しかし、その宗教的性格が正統カトリック的であるか否か、という問題になると議論が分かれる。兄思いの妹イザベルを初め、多くのアラン＝フルニエ愛好者・崇拜者は、その正統性を疑わないが、これに反対する意見も多い。その極端な純粋性への志向に注目して、カタリ派あるいは天使主義的傾向の強い作品とし、作者自身の求めた宗教性は、厳格な意味でのカトリックの教義に縛られるものではなかった、と主張するのである。そのように理解するのが妥当ではないか、と筆者も思う。

そうした小むずかしい議論はさておき、この作品は、今や、フランスにおける最もポピュラーな青春文学の傑作として、ひろく愛読されている。多くの中等教科書に抜粋が採られているそうである(同窓の級友和田周作君の御教示による)。1964

年に決定版ともいうべき校訂新版が刊行されたとき、初版以後五十年になるにもかかわらず、当時のベストセラーの一つになったほどである。1975年以來、イザベルの息子アラン・リヴィエールが中心になって「リヴィエール＝フルニエ友の会」が組織され、季刊の会報を発行している。わが国の、宮沢賢治と「賢治友の会」とを思わせる。

フランスではそうであるが、さて日本ではどうであろうか。精神的風土の相異から、あるいは案外難解な作品とされるのではないか。

## \*

短篇《肖像》については、これ以上別につけ加える必要はないのだが、作中でフロマンタンの長篇小説《ドミニック》の一節が引用されているので、これについて一言蛇足を加えておく。《ドミニック》は作家アラン＝フルニエに強い影響を与えた。彼の短い作家生活の全体を最後まで支配したといってよい。「ドミニック」における「マドレーヌ」が、「モーヌ」における「イヴォンヌ」にびたり照応する、などは断るまでもないとして、心理描写と重ねあわされている風景描写に、私は、両者の基調となっている気分(Stimmung)の共通性を感じずにはいられない。この「気分」を散文詩形式に凝集化したのがこの短篇《肖像》だった、と私はいいたい。(《ドミニック》には市原豊太訳があるが、戦前の出版で現在は絶版になっているようである。参看することができなかった)。

## 文 献

- アラン＝フルニエ関係の文献は歴大な数になる。ここには、私が目をとおすことができ、かつ散佚をまぬかれて今も手許に残っている数冊をあげるにとどめる。(刊行の年代順にあげる)。
- Isabelle Rivière: *Vie et Passion d'Alain-Fournier*. Fayard, Paris, 1989. (初版は Monaco, 1963).
- Paul Genuist: *Alain-Fournier, face à l'angoisse*. M. J. Minard, Lettres Modernes, Paris, 1965.
- Christian Dédéyen: *Alain-Fournier et la réalité secrète*. Paris, 1967.
- Jean Loize: *Alain-Fournier, sa vie et Le Grand Meaulnes*. Hachette, Paris, 1968.

Walter Jöhr: Alain-Fournier, le paysage d'une  
âme. Neuchatel, 1972.

Marie Maclean: Le jeu suprême, Structure et  
thèmes dans 《Le Grand Meaulnes》. José Corti,  
Paris, 1973.

Claude Herzfeld: Le Grand Meaulnes d'Alain-

Fournier. A. G. Nizet, Paris, 1976.

Jean Bastaire: Alain-Fournier ou l'anti-Rimbaud.  
José Corti, Paris, 1978.

Stephen Gurney: Alain-Fournier. Twayne, Boston,  
1987.

(1997. 6. 25 受理)